

「ソーシャルワークにおける子どもの自叙伝づくり」

才 村 眞 理

はじめに

生まれた家族から事情があって離された子どもたちと一緒に自叙伝をつくる作業は、現状とこれまでに起こったことに向きあい、気持ちの整理をつけることを助ける強力な方法である。里親へ養子前提に委託された子どもたちや、児童虐待を受けたり、遺棄されて、あるいは親に家出されたりして、乳児院や児童養護施設へ措置された子ども、あるいは非行を犯して児童自立支援施設に入所した子ども等について、自身のルーツについてきちんと聞かされていないことも多い。イギリスではそうした子どもたちは、ライフストーリーブック（以後LSBという）をソーシャルワーカー（以後SWという）とともに共同作業として作っていくことが、子どもたちのアイデンティティの確保に重要であるとされている。日本のそうした子どもたちにどのようにしたら自叙伝を作ることができるのか、自叙伝を作るにあたっての環境づくりや自叙伝の内容について明らかにしたい。

第1章 子どもの自叙伝づくりの必要性

子どもだけでなく、大人であっても自身の生き立ちやこれまでの人生を歩いてきた道筋を辿ることは、現在の自分の立っている位置、そして将来の自身の歩くべき道筋が見えてくるために大切なことではないかと思われる。このためには、自身のこれまでのライフストーリーを知るだけでなく、子どもが思春期に入る前に、そのライフストーリーを信頼できる大人と一緒に書き記すことは、その子どもにとってのアイデンティティの確保に役立つと思われる。このライフストーリー（自叙伝）を書き記したブック（本）を作ることが自叙伝づくりであり、その必要性について、文献調査した。

1. 子どもの権利条約に見る子どもの出自を知る権利

子どもの権利条約（Convention on The Rights of the Child）は1989（平成元）年第44回国連総会にて採決され、日本では1994（平成6）年に批准し、世界で158番目の締約国となっている。この条約の第7条では「—できる限りその父母を知りかつその父母によって養育される権利を

有する。」とある。又第8条では「1. 締約国は、児童が法律によって認められた国籍、氏名及び家族関係を含むその身元事項について不法に干渉されることなく保持する権利を尊重することを締結する。2. 締約国は、児童がその身元関係事項の一部又は全部を不法に奪われた場合には、その身元関係事項を速やかに回復するため、適当な援助及び保護を与える。」とある¹⁾。この第7条では、子どもが自身が誰から生まれたのか、そのルーツを知る権利があること、そして第8条では、子どものアイデンティティの確保が必要で、自身の家族関係等の身元関係事項の保持が子どもにとって重要であることを規定している。自分がどこから来て、どう生きてきたのか、つまり、誰から生まれ、どのようにこれまで生活してきたのかの真実を子どもに知らせ、子どもの気持ちをサポートしながら、整理していくことはそのアイデンティティを築く上で非常に重要なことである。この第7条の「父母を知り」については、国際ソーシャルワーカー連盟²⁾も、『「親」とは、普通子どもを産んだ生物学的な実親を指します』と解釈し、また、「ソーシャルワーカーは、——アイデンティティは人間の幸福に欠くことのできないものであると認識しなければなりません。」と説明している。生物学的親を知り、その後育った道を辿ることがアイデンティティの形成に有用であると思われる。

2. 施設入所した子どもにとっての必要性

施設入所した子どもたちの中には、幼い頃の実親と分離され、その記憶のないまま施設入所させられたり、おぼろげな記憶はあっても、なぜ施設に入らねばならなかったのか、なぜ生みの親は自分を育てることができなかったのかについて説明もなしに時間が経過していることは多い。しかし、子どもは明るく振舞い、気にしていないように見えても、自分の親との関係や将来の不安などは抱えているものである。児童福祉施設の職員向けに書かれた厚生労働省のマニュアル³⁾に、「知る権利を守ることは、主体性のある『力』(エンパワメント)を与えること」とあり、そしてその伝え方として「自ら理解できるように『支え、育てながら』情報提供を行っていく必要があります。」と言っている。それはまさしくソーシャルワークの「支える」機能に通じている。また、「自分の親や家族のこと、生育歴に関わる情報等自分のルーツについて知りたいと思うのは当然です。それが、『自分の存在』や『自分らしさ』を確認し、アイデンティティの確立にもつながっていきます。」とあり、自叙伝作りが子どもの成育歴に関わる情報をサポートしながら知ることを援助し、それが自分とは何か、自身のルーツを知るなどアイデンティティの確立に有効な手段であると思われる。

3. 里親に委託された子どもにとっての必要性

里親委託の子どもにも自叙伝作りは子どものアイデンティティを築く上で重要である。里親委託の場合は、養育のみを目的として里親委託される場合と養子縁組前提で里親委託される場合がある。養子前提の場合は養子であることをどう子どもに真実告知していくのかは永遠のテーマで

ある。どちらにしろ、乳幼児期に委託された場合は子どもへ十分な説明がない、あるいは大きくなって自身も納得しているとはいいがたい場合も多い。里親委託中の子どもの養育のためのマニュアル⁴⁾に、「過去を忘れない手助けをする」見出しがあり、そこでは「欧米では、里親のもとで生活する子どもたちには、生まれてからのライフストーリーを継承できるよう、『ライフストーリーブック』(LSB)を作るということが勧められています。生い立ちを写真や文章を織り込んで作ったものです。LSBは子どもが『自分がどのように成長してきたか』を理解する手助けになると考えられています。」と説明している。

4. さまざまな現場からの告知から始まる援助

川畑隆は「告知から始まる援助」⁵⁾があることを提案し、医療におけるインフォームド・コンセントのように福祉の現場でも子ども達にさまざまな形での告知をすることから援助をスタートする、あるいは告知と共に援助していくことが重要であると投げかけている。ここで強調されていることは、援助が「より自覚的になる」、しかし「告知したことで終わるものではない」「告知したそのときから具体的な援助が始まる」「告知する側には、その願いに向けた変化をめざして相手と一緒にスタートする覚悟が必要」と述べている。子どもの自叙伝づくりには、子どもの生育歴を子どもと一緒に辿り、生みの親の真実を告知する場面もあるかもしれない。生みの親から別れなければならなかった、過酷な真実を告知し、子どもの気持ちを受容し、子どもが向き合うことをサポートしていく、そういった場面もあるかもしれない。しかし、告知が自叙伝作りのキーワードとなり、子どもにとって最善の利益を確保した上で告知と共に援助していくことは重要であろう。

第2章 イギリスにおける自叙伝づくり

1. ライフストーリーブック (LSB)

イギリスの英国養子縁組里親機関協会 (British Agencies for Adoption & Fostering, 以後BAAFという) によって出版されているLSBである「わたしの人生と私」(“My Life and Me”⁶⁾) はケアに入った子どもが作る自叙伝の本である。イギリスでは里親委託・施設入所した子どもが信頼できる大人と共に自叙伝を作り、子どもが自尊心を失わずに生きていくための方法が工夫されている。日本でもこういった自叙伝をつくれなかと考え、このLSBについて概観する。

この本の作者ジーンは、子どもを里親に出したり養子縁組したりする仕事をする過程で、生まれた家庭から離れて暮らし、特に頻繁に移動を経験すると、子どもたちは自分の人生の意味をなかなか理解できないでいることに気づいた。彼女はSW、里親、そして養子縁組した両親が、預かる以前のより年少のころの子どもに関する包括的な記録がないので、子どもに関する情報や将来への予想をすることが難しいことに気づいた。この本の目指すものは、親から離された子ども

たちが自分自身について強い意識を持ち、自分が何者であるのかを理解し、新たなスタートへの基礎を築き自らの人生をより良いものにしてゆくことである。この本は子どもの自叙伝であるが、この本を完成することは自叙伝を作る作業のあくまで一つの手段であると説明し、信頼できる、決して途中で投げ出さない大人（SWや里親など）との関係をベースにして子どもの自叙伝を作ることが大切で、その結果として子ども自身の自己イメージのアップにつながることを望まれるものである。「一番大切なことはこれはあなたについての、そしてあなたのための本だということです。あなたにとってこの本が役に立つこと、あなたが楽しんで記入してくれることを願っています。そしてこの本を読むことによって、あなたがとても特別で大切な人だということに気づいてくれることを願っています。」⁷⁾と最初に述べている。

この本には、写真を貼り付ける、絵や文を書くなど単にアルバムとは違い、そこには大人とのやり取りの結果、作る過程で事実を確認する、さまざまな気持ちを表現するという柔軟な作り方で、子どもがやめると言う時まで作業は続くのである。生まれた時から、最初の親との分離、そして時系列に次のケアに行った時、現在までのさまざまな事柄がそこには載せられている。子どもは一生大事に持っている場合が多い。ケアに入らなくとも誰でもこのような本を作ることは人生を肯定的に生きるために役立つと思われる。両親の離婚や家族の引越しなど人生のさまざまな転機をこの本は整理し、前へ推し進めてくれるものであると思われる。

これを日本で使用するとなると少し日本の文化や生活上、そして実態と合わないところもある。たとえば、家族それぞれの信仰する宗教などの箇所や、イギリスでは里親委託の子ども〈養子前提も含む〉が想定されているが、日本では施設入所の子どもがほとんどであり、そういった想定の違いなども考慮する必要があるだろう。

2. ライフストーリーワーク（以後LSWという）

イギリスの同じくBAAFにより出版されたLSB作りの方法を示す“Life Story Work⁸⁾”の概略を示し、その中で指摘される条件やリスク等について研究する。

これは、子どもが信頼できる大人（SWや里親他）と一緒に自叙伝を作成するためのマニュアルである。そして自叙伝作りのみではなく、子どもたちと実際に親探しをしたり、実の親との面会に同席したりと、自叙伝を作成する準備段階から作成中に子どもと作成を手助けする人との信頼関係の下にさまざまなワークを行う、その方法を提示しているものである。ワークを行うとどんな効果があるかについては、日本でいう措置を決定する行政機関が、子ども達の家族と効果的なコミュニケーションを持つことで、より良いパートナーシップを築くことができ、また生まれた家族から離された子どもが、自らの過去を理解してしっかりとした将来を築く機会を持つために非常に重要な作業であると説明している。子ども達は、過去・現在・未来をつなぐ架け橋を渡るための援助とサポートが必要であり、このワークがその助けになると説明している。このワークを始める前に、子どもの情報を例えば児童記録などを注意深く読み、子どもの背景について理

解しておく必要がある。また、子どもの背景に現れる重要な人に手紙を書くことや訪問なども必要であると説明し、生みの親の状況に触れる用意をする必要があると示唆している。過去を理解することはしばしば不条理に恐れる出来事を追ひ払い、絡み合った結び目を解いてくれると言っている。そしてこの自叙伝作成は作業方法であって、治療モデルではない。また、専門家が行うのではなく（スーパービジョン体制は必要だが）最後まで責任を果たすという心構えができていなければなら誰でもこれを行うにふさわしい人となっている。そしてこの仕事を引き受けた人は子どものSW、他の重要な人々と定期的な話し合いを持つ必要があるのである。はじめは1週間に1回、1時間程度必要で慣れればもう少し頻度をあけても良い。

非常に幅広い内容を包含するワークであり、これが日本で行われるためには、児童施設、里親、措置期間である児童相談所の価値の共有が先決であると思われる。

3. イギリスでの調査

(1) ロンドンを訪問し、2007（平成19）年2月、英国児童虐待防止協会に所属するEllen Marks（NSPCC Social Worker & Play Therapist）にイギリスでのライフストーリーワーク（LSW）についてインタビュー（O県心理職と共に）を行った。実際にどのように子どもたちにLSB作りを行っているのか、ノウハウについてインタビューした。

○イギリスでは1980年代に施設制度が変わり、現在は殆ど子どもの入所施設はない。ただし、情緒障害と行動障害をもつ児童の施設はある。また、家庭崩壊し、里親委託が失敗したような児童のための施設もある。施設に預けられる子どもは、13歳以上である。

○施設にいる子ども達には、LSWは不可欠だ。子ども達は過去を知り、その過去を「現実」として受け止めることが必要。大人でも自分の身に起こったことを理解しないと前に進めない。子どもも本当のことを知らないといけない。

○年令に応じて、理解できるレベルで過去を知らせていくことが大事だ。子どもに本当のことを言ったら可哀想だといって隠しておく、穴があいたままになる。物語を聞かせるようにすることが大事だ。

○LSW適用の事例に5歳の女の子がいる。彼女は2年間里親に預けられていたが、再び母親宅に戻ることになった。しかし、かつて母と住んでいたときのすごく嫌な思い出があるため、母を含めた3人でLSBを作ろうということで取り組み始めている。このようにLSWは、子どもと1対1でやるのではなく、その子どもと一緒に暮らしている人も入れて行うとよい。例えば、里親と子どもとSWというように。今暮らしている人と一緒にやると、現実味が出る。上記の5歳の女児の例でいくと、月3回は子どもと2人で個別にやり、月1回は母親を入れてLSWをやっている。

○これまで、7歳から13、4歳の子どもにLSWを適用した。施設入所中の児童、里親委託中の児童、養子縁組された児童に対して実施した。殆どの児童が複雑な過去を持っている。居住地を

何回も変わっている子もいる。

- 本来、施設や里親宅にいる子どもはみなLSWをするべきだろうが、基本条件として、今住んでいるところが安定していることが大事である。
- 幼い頃の不幸は知らせない方がいいという考え方もあるが、大人になってからそれを知るのか、それは返って良くない。言い方の工夫はあるだろう。どの時期にどんな言い方で知らせるかは考えないといけない。子どもにとって外傷にならないよう配慮が必要。
- 昔は、養子だと言ってはいけないという考え方があったが、絶対何かのきっかけで養子であるとかわかってしまうものだ。70-80年代に、子どもが小さいうちに告知しないといけないとわかった。相手がまだ赤ちゃんであっても絶対に言うのである。「赤ちゃんはお腹で育つけど、あなたが育ったのはこのお腹じゃないんだよ。」と、小さい時から伝えていくのだ。子どもはそれを理解するし、受け入れていく。
- 上の子が8歳、下の子が2-3歳の時に、父親が酔って暴力をふるい母親を殺した。そのことを子ども達は知っていたが、大人が隠すので、誰にも話ができなかった。そのことを整理していくプロセスが大事なのである。
- 10歳と11歳の異父兄妹がいた。施設を12-3箇所も変わっていた。虐待はなかった。女の子の方は、レイプで生まれていた。その部分だけ、兄妹別々にワークをやった。(妹が兄に話したかったら話してもいいが、ワークは別々にする)
- DV(配偶者間暴力)のあった家庭出身の子どもに対しては、DVの場면을劇にして再現し、それを写真やビデオにとってLSBに入れた。「こんなことも家であったね」と。
- 母親が白人、父親がカリブの黒人という子どもは、父親のことを何も知らなかった。ビスケットでカリブ海の島を作って写真を取り、お父さんはここから来た人と整理した。
- 里親委託中の子どもを生まれた病院に連れて行ったりもした。
- ファイルをめぐりながら、本を完成するのではなく、実際に訪問したり、体験するプロセスが大事なのだ。現場に連れて行ったり、一緒にものを作ったりと。
- 従って、LSWを行うには、かなり準備をしないとといけない。何時間もファイルを読んで、よくその子のことを知ることが大事。また、過去の里親に連絡をとって、写真をもらえるようにすることなども必要になってくる。
- ケア・システムにいる子どもについては、全員実施しないといけないと考えている。なぜこの子はここにいるのか、誰がその理由を説明したのか、この子はわかっているのか、また今の場所にこの先1、2年安定した生活ができるかどうかもある大事な条件となる。一時保護中の子どもや、施設が変わりそうな時に始めるのは良くない。
- LSBは一度作ったら、その後、養親や里親と本人で付け加えていく。最初に作った時は関心ないという顔をしていた男児がいた。成人後に車が盗まれ、その中にLSBが入っていた。彼はそれを失ったことをとても悔しがった。20歳になるまで肌身離さずに持って自分で付け加えもし

ていた。その後、写真を集めてまた彼と一緒にLSWをやった。

- 養子の子どもなど、養親に他の子が生まれて、心が動揺したときなどにも、改めてLSBを出して、その子と一緒に見たり、付け足したりすると効果的だ。
- LSBは、大抵の子が大事にとっている。まず始める時に、一緒に店に行って、本とフォルダーとペンを選ばせる。それをその子専用の箱にしまって置く。普段の勉強用とは異なる。バインダーやノートも自分で選ばせる。
- My Life & Me（2章1）のように、フォーマットがあると、全ての子にあてはまらない。フォーマットは、心の準備に使うのにはいいだろう。何処で生まれた、体重は何グラムだったと答えたら、それと同じ重さの砂糖で体験させたりする。そうすると現実味を増していくことができる。家系図に集中したり、赤ちゃん時代に集中したりもする。
- 出生証明書のコピーを渡すというのでもいい始め方だろう。出生届には、そのときの両親の住所が書いてある。そこへ行って写真をとる、生まれた病院に行く等、机上の空論にしない工夫が大切だ。
- 子どもの年令や経験にもよるが、あらかじめ年表を書いて、その中のことについて話すというやり方もある。こっちが言うだけでは生き生きと伝わらない。「何が聞きたい」と言うだけでは興味を持たない。その子のヒストリーを知っているということだけでなく、その子自身、興味をもってもらっている、大事に思ってもらっていると思えることが大事だ。
- 家や地域など、自分が属しているベースがないと、生きていくのは大変だ。理想化したファンタジーをもつことをやめさせることにもつながる。ママはプリンセスではなくママはイン・プリズン（刑務所の中）と、現実を知ること子どもは落ち着くものだ。
- お母さんはあなたを育てられなかった、お母さんはあなたの安全を守れなかった、ともう少し具体的に言った方がいいだろう。赤ちゃんを安全に育てるためにはどうしたらいいか一緒に考えてみよう。子どもは言うだろう。おっぱいをあげる、オムツを変える…。その頃のお母さんは、悲しいことがあって、それができなかったんだよ。それで、周りの人が心配して、あなたを施設に入れたんだと。そして例えば、雑誌の写真を見て、母と子が色々やっている場面を切り抜く。それを貼って行って、あなたが小さい頃、お母さんはこんなことができなかったというストーリーを書き込んでいく。
- 施設の職員、里親、養親は、LSWをすることが期待されている。しかし、子どもの情報はSWがもっているので、SWの支援がないと実施できない。LSWは、本当はSWがすべきことなのだが、一人で10―15人のクライアントを持っているので、現実にはできない。施設の先生も里親も、LSWをすることで、子どものことを学べるので、一緒に暮らす人がやるのはいいことだと思う。例えば子どもが7―8歳の頃に養親になった人が、それまでの人生と一緒に振り返るというのは、とてもいいだろう。
- 外部の人が通ってきてLSWを実施するというのはいかがという質問に対して、いいアイディ

アだ、施設の職員1－2人も一緒に参加することで、広げることができるのではないか。児童相談所の職員がやるなら、施設職員や里親に同席してもらってやるのがいいだろう。

- 里親とか治療的教育を受けていないのにやっている。その代わり、訓練を受けた人と一緒にやる。これ自体が治療的であり、計画的に実施することが必要。生い立ちに殺人やレイプが絡んでいる時は、SWと事前によく相談して行う必要がある。簡単にできるものではない。こちらが子どもに渡す情報が必ずしもいいものではないので、その後の子どもの行動が変わることもあると、理解しておく必要がある。同じLSWでも、ワークブックに印をつけるだけのやり方もあるだろうし、治療的にやる方法もある。
- 13歳の時に、母親が自分を産んだ時に死んだと知って、その後里親宅での生活がダメになり、路上生活者になり、その後セキユ・ユニットに入った児童がいた。その子とLSWをやり始めた時は里親委託が失敗になりかけていることを知らなかった。
- 思春期前に、基本的な情報を与える方がいい。思春期は、ルーツを知りたくなるのに、それを大人になるまで待てというのは良くない。
- 例として15歳の男児がいる。彼には基本的な情報のみを与えていた。15歳で生みの母に連絡をとった。養親と母の間で同意事項があった。母が麻薬中毒で、売春婦だったということは、子どもには伏せておくことになっていた。それを伏せていたばかりに、自分がなぜ養子に出されないといけなかったのかと、その子は荒れだした。生みの親は、生活も変わったため、過去のことは知られたくなかったし、養親も母親を気遣って伏せておいてあげたかった。その子は16歳になるとSWに対して怒りを向け、養親が母の元から自分を盗んだと思うようになっていった。そして、荷物をまとめて実母の元に行ってしまった。そして、最終的には母の過去を知ってしまった。彼の弟か妹が過去の秘密を知っていて、それを本人に言った。その後、みんなが知っているのに秘密にしたと、彼はものすごく荒れだした。
- 秘密にしようと思うとき、それを伏せておく理由と、伏せておかない方がいい理由をよく考えるべきだ。

以上、インタビューしてみてエレンの報告はまさに実践からもたらされる報告であった。自叙伝を作品として作ることに集中するのではなく、子どもと一緒に作る過程が重要であり、援助者は自身の問題に向き合う時もあり、そのスーパービジョンが重要である。

(2) ロンドンにあるBAAF（英国養子縁組里親機関協会：British Agencies for Adoption & Fostering）を2007（平成19）年9月に訪問し、政策研究開発部長であるジュリア・フィースト（Julia Feast : Policy, Research & Development Consultant）にインタビューを行った。イギリスにおいてLSWがどのように行われ、BAAFがどのような立場を取っているのかについて聞いた。

- 里親委託の際（イギリスでは里親家庭を転々とする子どもが多い）子ども個人個人が自分の記録を持ち歩くことができ、次の里親へノート（LSBのこと）を引き継ぐ。

「ソーシャルワークにおける子どもの自叙伝づくり」

- 里親宅へ初めて行った時何も書いてない白紙のノートをもたせ、その成長の記録を一冊のノートに記載し、次の里親家庭へ持って行くと連続性を保てる。
- そのノートは子ども達の思い出の詰まったものである。
- SWによってレベルは違うので、常に同じレベルのLSWができるとは限らない。しかし、子どもが過去の情報を持つことが必要であるという基本理念はどのSWも持っている。スーパービジョン体制についてはチームの中にマネージャーがいてその人がスーパーバイザーである。何かあれば必ずその人に相談できる体制は整っている。
- 2007年版「ライフストーリーワーク」⁹⁾はコンピューターを使っていろいろと実践することが追加された（2003年版との違い）。また、CDも付いていて、コンピューター上でゲーム感覚で子ども達がLSWをすることができるようになっている。
- BAAFでは、LSWのワークショップを行っている。SWのための基本的なトレーニングを行うものであり、2日間コースで1日は朝10時から4時までである。ルーマニアで現在、出張ワークショップを行っている。
- BAAFでは、子どもが実の親を探し、再会することをサポートするサービスも行っている。それは仲介サービス（intermediary service）という。

以上のことから、かなりイギリスではLSBあるいはLSWは一般的になっていることが伺えた。また、行う上での準備やスーパービジョン体制の必要性が浮き彫りとなった。また、誰が行うかについて、SWが望ましいが、イギリスでもすべては困難で里親や施設の職員が行っている。日本での実施を考慮すると実施する人材不足が考えられる。児童福祉司や児童心理司がスーパービジョンするとして、施設の保育士や児童指導員が行うことも考えられ、将来は外部のボランティアや予算がつけば非常勤で児童にかかわる元専門職が行うことも考えられる。

第3章 日本における自叙伝づくりの実践

1. 高鷲学園における試み

大阪の児童養護施設 高鷲学園による試みについて平成19年2月筆者の率いるライフストーリー研究会¹⁰⁾にてインタビューした。自身の生い立ちを子どもが知る必要性があるという認識が多くの児童施設にも広がりつつあるが、長年取り組んでいる高鷲学園を取り上げた。

高鷲学園 児童指導員 川島洋子より〔生い立ちの話し合い〕の実践について聴取する。

16年前、中3の子どもたちが大変だった時、進路合宿として始めた。子どもたちの進路や将来の計画を考える時、生い立ちの記憶を整理することは避けられないと感じた。その後年齢を広げ、5年前からは小3から学年ごとに1年に1回、同じ学年の子どもたちで自身の生い立ちを語る会を開催。生い立ちとは、人が生まれて育ってきた道筋のこと、いつ、どこで生まれ、小さい頃のこと、父母きょうだいのこと、どうして学園に入ってきたのかを知ること。この施設に入所した子どもは全員、

この話合いに参加する。そして同学年の子ども集団の前で話す前に、担当児童指導員と1対1でかなりやり取りするとのことである。その際に自身の進路のことだけでなく、自身の生い立ちについて学ぶことが大きく、みんなの前で話していいと思ったことを話し、強制はしない。

インタビューにより、この取り組みは児童指導員の負担が大きいと思われるが、組織として必要性を認め、学園をあげて取り組みを行っているところが先駆的であり、子どもの知る権利に価値をおいたすばらしい実践であると思われる。

2. 家庭養護促進協会・神戸事務所・米澤普子の取り組み

里親推進団体である家庭養護促進協会では里親の委託された子どもとのLSWの試みがなされている。その内容について2007（平成19）年3月、家庭養護促進協会・神戸事務所・米澤普子に筆者の率いるライフストーリー研究会にてインタビューし、その実践方法、および限界についても研究する。

- 10数年前にイギリスに研修に行き紹介されて知ったが、その20年前に行った時はなかった。
- 日本ではLSBの内容が馴染むのかと思う。
- LSB作りよりも、それも含めたLSWの方が馴染みやすい。
- 生い立ちを話すことが大切なのだと養親に話している。子どもには小さい頃の具体的エピソードを含めて話すことがいい。例えば、初めて会った時、水玉の服を着ていてとてもかわいかったとか、何グラムで生まれた等、成長と共になぜ親が育てられなかったかについても含まれる。施設で成長したある女性は少し髪の毛が縮れていたことから、一体自分は何人だと思っていたが、そういった埋めていく作業の中で、日本人としてのアイデンティティーが持て納得できたということもあった。
- 生い立ちを話すことは親の問題に関係するので、親の了解が必要となることもある。生い立ちをどのように伝えるかが課題である。
- あいまいな記憶は余計に不安になる可能性がある。ある程度告知することにより、あいまいさが取れて、記憶を自身でコントロールでき、安定に繋がる可能性がある。
- 自分の育ったプロセスを埋めるためのルーツをたどるということでは、出生からスタートするのではなく、現在から逆上るのがよい。
- 児童養護施設で保育士がこの問題に取り組み始めている。なぜ生みの親と暮らせないかについて、ライフブックにして伝えていけるかという課題はあるが、「生い立ちの整理」の必要性を感じている職員も多く関心が高まってきている感がある。
- グリーフワーク（悲嘆のワーク）も大事。

米澤氏は里親が里子に行く（養子も含め）LSWを実践しており、イギリスとは同様にはできない日本の限界について理解している。しかし日本でも生い立ちを知ることの重要性が高揚してきた時代に入ってきたとの認識であった。

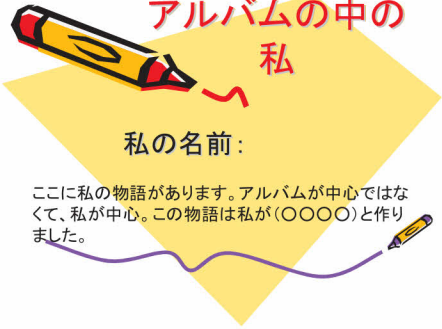
第4章 日本で実践するための環境条件及び自叙伝作りの試案

1. 環境条件としては、試案であるが、以下について考慮した。

- 対象：児童養護施設等に入所中の子どもに行う場合、入所して生活が落ち着いており、その後1年間程度施設に入所が継続する見通しが立っている、子どもの年齢は小学校1年以上中高生（できるだけ思春期になる前が望ましい）、保護者の了解が得られる子ども（保護者が存在する場合）で、LSBと説明してもわかりにくいので、『アルバムがないから一緒にアルバム作りをしたい』と説得するのも一方法である。すべての施設に入所した子どもに行うことが望ましいが、人員的に難しい。子ども自身が親のことについて聞いてきたり、親が行方不明、あるいは親の状況の変化が大きく、子ども自身がそのことで不安定になっているなど、援助者の必要性を感じた子どもに実施する。
- 誰がおこなうのか：継続して定期的にそのワークに時間を確保できる専門職がいる、また、その専門職が（危機の場合等）スーパービジョンが受けられる体制にあることが必要である。そして行う側の専門家とは、児童相談所の児童福祉司が望ましいが、児童虐待事例の急増に伴い、とても時間的に確保が困難と予想され、児童心理司や施設の児童指導員、保育士あるいは、退職した元児童福祉司や元児童心理司、元保育士等のボランティアあるいは囑託として配置することも可能ではないかと思われる。
- いつ行うのか：日本の現状を考慮すると、月1,2回定期的に1～2時間程度、確保する必要があるだろう。そして永久にその担当者が時間を確保することは困難と思われるので、とりあえず1年間という、年度で区切りをつけることを子どもに伝えてスタートする。
- スーパービジョン：とりあえず、始めてみる。そして児童相談所の児童心理司や医師等のスーパービジョンを受けられる体制を確保し、定期的にケース会議を開く必要がある。

2. 自叙伝作りの日本版LSB試案

親と分離され、児童施設に入所した子どもと自叙伝を作るためのLSBは白紙の本で行うことが望ましいが、日本で初めて取り組む場合何を書くのか、一応の型があれば進めやすいと思われる。その試案についてMy Life & Me（2章1）を参考^{10）}に日本版（簡易版）を作成したものを、以下に提示する。

 <p>私の名前:</p> <p>ここに私の物語があります。アルバムが中心ではなく、私が中心。この物語は私が(〇〇〇〇)と作りました。</p>	<h3>私の生まれた時のこと</h3> <ul style="list-style-type: none">● 私が生まれたのは〇〇年〇〇月〇〇日です。今年は何年だから今〇〇才です。* 赤ちゃんの頃の写真・赤ちゃんを想像した絵 <p>* 私の名前について 知っていること</p> <p>* 生まれた頃の社会の出来事・新聞記事など</p>
<h3>赤ちゃんだったころ</h3> <ul style="list-style-type: none">● 生まれたところ・時間・体重・身長など <p>* 私の成長記録: 歩行・言葉・病気・予防接種記録など</p> <p>* 好きな遊び・好きなおもちゃ・印象に残ったおはなし</p>	<h3>赤ちゃんの頃の家族</h3> <ul style="list-style-type: none">● 生みの父母について *家系図 <p>* おじいちゃん・おばあちゃんについて</p> <p>* 生みの親と一緒に住めない理由: 文・絵で書く</p>
<h3>生みの親との連絡・思い出</h3> <ul style="list-style-type: none">● 住所を変えること <p>* 先週起こったこと → 今週起こったこと</p> <p>* 昨日の気持ち → 今日の気持ち</p>	<h3>以前の私</h3> <ul style="list-style-type: none">● 今までにあなたの前に現れた人々 <p>いつ どので 誰が どのように</p> <p>* 今までにさよならと言った人・言いたかった人・言わなければならなかった人</p> <p>* これまで大切にしてきたもの・以前の私・写真・文・絵 言葉・写真</p>
<h3>幼児の頃</h3> <ul style="list-style-type: none">● 幼児期の遊び・お友達(写真・文・絵) <p>* 幼稚園・保育所の思い出</p> <p>* 楽しい思い出・楽しなかった思い出</p> <p>* 家庭の思い出</p>	<h3>小学校の頃</h3> <ul style="list-style-type: none">● 小学校の名前・場所 <p>* 友達・先生</p> <p>* 楽しい思い出・楽しなかった思い出</p> <p>* 家庭の思い出</p>

「ソーシャルワークにおける子どもの自叙伝づくり」

<p>中学校の頃</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 名前・場所 <p>*友達・先生・クラブ・勉強</p> <p>*楽しかった思い出・楽しなかった思い出</p> <p>*家庭の思い出</p>	<p>施設について</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 名前・場所 <p>*ここへ来た日のこと</p> <p>*楽しかった思い出・楽しなかった思い出</p> <p>*面会・外泊・家族のこと</p> <p>+なぜここへきたの</p>
<p>今の私</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 私の顔と体・写真・絵・文 <p>*私の好きな食べ物・飲み物</p> <p>長所 短所</p> <p>私</p>	<p>今の私</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 日課 <p>ウィークデー</p> <p>休みの日</p> <p>行事の日</p> <p>・特別な日</p>
<p>将来の私</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ○○年後の私はどうなっている？ <p>*私が居たい所・やってみたいこと・連絡取りたい人</p>	<p>「アルバムの中の私」を仕上げた私</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ○○年○○月○○日完成 ● これを完成させた私について思うこと <p>*役に立つ住所と電話番号・メールアドレス</p> <p>好きな写真</p>

以下に作成したポイントについてまとめる。

- 題名を『私のアルバム』としないで『アルバムの中の私』とした。それぞれのページの中の私が主人公であって、アルバムを作ることにとらわれすぎないためである。
 - それぞれは1ページで終わらないかもしれない。そのときはコピーして2枚3枚入れる。
 - 初めから順番に作っていかなくとも現在からはじめて過去に遡っても良いと思われる。
 - 写真がなければ、子どもが描いた絵とか、文で表現しても良い。
 - 出来上がったものをコピーしておくか、又はコピーの方を子どもが持つ。
- (この研究は特別研究費に関する規定及び帝塚山学園学術教育研究助成基金規定に基づく助成を受けている)

注

- 1) 高橋重宏・才村純編著「改訂 子ども家庭福祉論」建帛社 2006年 p13、p302
- 2) 国際ソーシャルワーカー連盟編著「ソーシャルワークと子どもの権利・『国連子どもの権利条約』研修マニュアル」社団法人 日本社会福祉士会国際委員会訳 筒井書房 2004年 p18、p39
- 3) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課 監修「子どもの権利を擁護するために 児童福祉施設で子どもとかかわるあなたへ」日本児童福祉協会 2002年 p67、p73
- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課 監修「子どもを健やかに養育するために里親として子どもと生活するあなたへ」日本児童福祉協会 2003年 p137
- 5) 「特集 告知から始まる援助 さまざまな現場から」『そだちと臨床』 編集委員会編集「そだちと臨床」Vol. 2 2007年 p 5 - 6
- 6) “My Life and Me” Jean Camis 2001, Reprinted 2003, 2004 Published by British Agencies for Adoption & Fostering (BAAF) (Skyline House 200 Union Street London SE1 0LX www.baaf.org.uk)
- 7) 前述 6 の前書きの部分に掲載
- 8) “Life Story Work A practical guide to helping children understand their past” Tony Ryan and Rodger Walker, Copyright BAAF 1993 Reprinted in 2003, British Association for Adoption and Fostering (200 Union Street London SE1 0LX)
- 9) “Life Story Work A practical guide to helping children understand their past” Tony Ryan and Rodger Walker 2007, Published by British Association for Adoption & Fostering (BAAF) (Skyline House 6-10 Kirby Street London EC1N8TS www.baaf.org.uk)
- 10) 平成17年12月に立ち上げた研究会で、子どもの自叙伝作りが児童施設に入所している子ども達のアイデンティティの確保等に必要であるとの認識により、研究活動している。メンバーは心理職、ソーシャルワーカー、児童精神科医他で構成。
- 11) Adapted from an original publication by Camis J (2001) *My Life and Me*, London: BAAF. Published with kind permission from BAAF—www.baaf.org.uk.